



学術図書・雑誌の保存

駒形 和男

最近の科学の進歩・発展は著しく、その出版物もペーパー・ラッシュと呼ぶほど膨大の量となり、図書館もその収納に頭を痛め、古い書籍、雑誌を廃棄せざるを得なくなっている。ときどき、大学や研究室の印を押した図書が古書として市場に出回るのは、このような事情によるものであろう。ここで言う古書は、いわゆる古文書や稀覯本ではなく、明治から昭和の初めにかけて蒐集された学術図書・雑誌のことである。

図書の価値を判断するのは難しい。単に古いというだけの理由で不要、何年以前の雑誌は廃棄と片づけてよいのであろうか。また、何十年も読まれていないとか、物理的に図書館のスペースがないので蔵書を廃棄するというのでは、喻えは悪いが、一種の焚書のようにも思える。動物・植物を問わず、微生物でもそれぞれの分類群の原記載は、その生物の存在と優先権を論ずるうえで重要な資料である。温故知新という言葉もある。一人でもその図書を必要とするならば、それを後世に伝えるのが国家の文化政策ではなかろうか。

もう20年も前のことである。国内ではどうしても見ることのできない本があった。それは、1800年代の後半に出版されたものである。たまたま、訪れたオランダの研究室の友人に、この本の所在を尋ねたところ、図書室に案内してくれた。書名を告げると、女性の司書が直ちに書架に案内し、たちどころにその本を取り出してくれた。その本は、昨日出版されたと思うほどきれいに、埃もなく保存されていた。この時の感激は、いまでもありありと思いだされる。

大正時代の文芸作家として名を残した芥川龍之介は、「大正十二年九月一日の大震に際し」という一文を残している。彼は、当日自宅で関東大地震に見舞われ、「この間家大いに動き、歩行甚だ自由ならず、屋瓦の乱墜するもの十餘」と記している。幸い、火災には遭わなかったらしい。このなかで、震災の状況や人々の様子をのべるとともに、「古書の消失を惜しむ」と題した一節をもうけている。その内容に学ぶところがあるので、原文のまま紹介する。

「今度の地震で古美術品と古書との滅びたのは非常に残念に思う。表慶館に陳列されていた陶器類は殆ど破損したといふことであるが、その他にも損害は多いにちがひない。然し古美術品のことは暫く措き古書のことを考えると黒川家の蔵書も焼け、安田家の蔵書も焼け大学の図書館の蔵書も焼けたのは取り返しのつかない損害だろう。商売人でも村幸とか朝倉屋とか吉吉（よしきち）だといふのが焼けたからその方の罹害も多いにちがひない。個人の蔵書は兎も角も大学図書館の蔵書の焼かれたことは何といっても大学の手落ちである。図書館の位置が火災の原因になりやすい医科大学の薬品のあるところと接近しているのも宜敷くない。休日などには図書館に小使位しか居ないのも宜しくない、（その為に今度のやうな火災にもどういふ本が貴重かがわからず、従って貴重な本を出すことも出来なかったらしい。）書庫そのものの構造のゾンザイなのも宜敷くない。それよりももっと突き詰めたことをいへば、大学が古書を高閣に束ねるばかりで古書の覆刻を盛んにしなかったのも宜敷くない。徒に材料を他に示すことを惜しんでついにその材料を烏有に帰せしめた学者の罪は鼓を鳴らして攻むべきである。大野洒竹の一生の苦心に成った洒竹文庫の焼け失せただけでも残念で堪らぬ。「八九間雨柳」という史朗の編んだ俳書などは勝峯晋風氏の文庫と天下に二冊しかなかったように記憶しているが、それも今は一冊になった訣だ。」いつの日か、大地震が日本列島を襲うと言われている昨今、蔵書保存の対策は大丈夫なのであろうか。

たまたま、大学の書庫に入ると独特のほこり臭いにおいと、喉がガラガラするような気分におそわれる。また、何十年間誰の手にも触れなかった本は、取り出すと手が汚れ、手がかさかさになる。限られた人数で何十万冊という蔵書を管理しなければならない図書館の職員の苦勞は理解できる。しかし、その本の内容が貴重であればあるほど、この状態でよいのかと、その著者に申し訳ないという気持ちになる。

オランダの図書室で経験したこと、国内の図書館で感じたことの違いは何処にあるのであろうか。単に、規模の違いに帰することはできない。これは、学術図書・雑誌の保存にかかわる価値観、文化の違いではなかろうか。ひいては、真の文化国家とはなにかということにつながることである。国の歴史と文化の伝承、学術の振興という観点から、国内に保存されている学術図書・雑誌の保存・管理の充実とともに、検索のシステムの日も早い整備が望まれる。

また、わが国で、古文書を含め図書の微生物劣化の研究に従事している研究者はきわめて少ない。微生物の研究者が蔵書の保存・劣化の研究だけでなく、広い意味での文化財の保存にも目を向ける時が来ている。昨今の古墳の絵画の保存を巡るマスコミ報道をみるにつけ、どうしてもっと早くから微生物による文化財の劣化に目が向けられていなかったのか、と考えさせられる。文化財の微生物劣化は、高温多湿のわが国にあっては当然研究の対象であったはずである。最近、米国でも文化財の微生物劣化が注目され、応用微生物学の分野に文化財の微生物劣化を研究する講座を設けるべきである、という論説が発表されている。



(東京大学名誉教授)